

ISSN 2436 - 5122

2023年度

# 徳島大学全学FD推進プログラムの実施報告

徳島大学高等教育研究センター  
教育改革推進部門



## 実施報告

## 2023 年度徳島大学全学 FD 推進プログラムの実施報告

齊藤隆仁<sup>1)</sup>・吉田 博<sup>2)</sup>・塩川奈々美<sup>2)</sup>・飯尾 健<sup>2)</sup><sup>1)</sup> 徳島大学教養教育院 <sup>2)</sup> 徳島大学高等教育研究センター

要約：徳島大学では、2002 年度から全学 FD 推進プログラムを通じて、FD の体系化、組織化、日常化を推進してきた。2023 年度は、4 年ぶりにワークショップ型のプログラムを対面で実施し、参加者同士の情報交換の機会を提供することができた。オンラインツールを活用した双方向 FD 「授業について考えるランチセミナー」では、2022 年度に引き続き高知大学と共同で FD プログラムの開発・運営を行った。「大学教育カンファレンス in 徳島」は対面会場での実施をメインとし、一部のプログラムをオンラインで配信するハイブリッド型で開催したことで、参加者同士の情報交換の機会を作ることができた上に、学外からの参加も多数あり、多様な参加ニーズに応えることができた。本年度実施した各プログラムの概要を記載し、アンケート結果等から窺える成果と今後の課題について考察する。(キーワード: 教育の質保証, 教育力開発コース, 授業について考えるランチセミナー, オンライン研修)

## 2023 Annual Report on Faculty Development Programs at Tokushima University

Takahito SAITO<sup>1)</sup> Hiroshi YOSHIDA<sup>2)</sup> Nanami SHIOKAWA<sup>2)</sup> Ken IIO<sup>2)</sup><sup>1)</sup> Institute of Liberal arts and Sciences, Tokushima University<sup>2)</sup> Research Center for Higher Education, Tokushima University

Abstract: Tokushima University has been promoting the systematization, organization, and routinization of faculty development (FD) through the university-wide FD promotion program since FY2002. In FY2023, workshop-style programs were held face-to-face for the first time in four years. Thereby, we were able to provide an opportunity for participants to exchange information with each other. Moreover, following the example from the preceding year, in 2023, the online interactive FD seminar "Lunch Seminar on Thinking about Classes" was developed and managed jointly with Kochi University. Moreover "University Education Conference" was held face-to-face, and some programs were delivered online, so we could create opportunities for participants to exchange information with each other. It is noteworthy that there were many participants from outside the university, and we were able to meet their diverse needs. An overview of each program conducted this year and discussions about future challenges based on the results of the questionnaire are described.

(Keywords: quality of education, Educational Development Course, Lunch Seminar on Thinking about Classes, online training)

## 1. はじめに

2023 年度は、2020 年からの新型コロナウイルス感染症がほぼ終息し、原則として対面授業が推奨され、対面授業とオンライン授業を組み合わせ実施することが可能な年となった。2023 年 10 月に実施した 2023 年度教員アンケート結果報告書(ティーチングライフ)においては、コロナ禍のオンライン授業を経て、多くの授業が対面授業に戻ったことが要因となって、学生とどのようにコミュニケーションをとったらよいかといった点につ

いて数多くの記述があった。またオンライン授業の良かった点を今後を活用する意欲も窺える。コロナ禍を経た現在、適切な場面でオンライン授業を活用し、より深化した教育が行われるためにも、個人の体験のみから教育改善を行うのではなく、FD という場で効果的な教育改善についての情報を部局あるいは大学で共有することが重要である。

以下、今年度の各 FD の具体的内容とその成果を述べる。(齊藤隆仁)

## 2. 教育改革に関する勉強会・意見交換

徳島大学の教育改革を遂行するために、徳島大学教育担当理事と全学 FD 推進プログラムの実施を支援する高等教育研究センター教育改革推進部門は、大学教育改革の動向及び徳島大学の現状について、意見交換を行い、具体的な教育改革の取り組みについて提案・検討を行っている。本 FD はマクロレベルの FD (教育改革 FD) として位置づけており、教学マネジメントを支える基盤としての役割も期待されている。2023 年度は、主に大学院生の汎用的な能力の育成に関わる「徳島大学版トランスファラブルスキル」の策定、関連する教育プログラムの整理や可視化に関する提案や意見交換を行った (表 1)。

教育改革 FD を通して、教育改革推進部門では、高等教育開発の専門的立場から、本学が取り組むべき教育改革を支援するとともに、教育の内部質保証を推進している。近年の大学教育においては、教学マネジメントの確立が強く求められており、教学 IR を機能させるための取り組みも必要である。また、アフターコロナにおける教育の在り方については、コロナ禍の経験を活かした新しい教育の在り方を検討することも重要である。

引き続き全学 FD 推進プログラムは本学の教育改革、教育の内部質保証に関わる取り組みを通じて、学習者本位の大学教育を実現することに貢献することが期待されている。(吉田 博)

表 1 教育改革に関する勉強会・意見交換

回	実施日	内容
1	6月5日	・徳島大学版トランスファラブルスキルについて
2	7月6日	・徳島大学版トランスファラブルスキルについて ・THE 日本大学ランキングの学生調査に関する IR 室の提案への対応について
3	8月22日	・授業設計ワークショップについて
4	1月31日	・全学 FD 推進プログラム及び問題意識等の共有

場所：教育担当理事室 (本部棟 3 階)

## 3. 教育の質保証 FD

### 3.1 目的・背景

徳島大学では 2018 年度に「徳島大学における教育の内部質保証に関する方針」等が定められ、学部等ごとに「教育プログラム評価委員会」が設置された。各教育プログラム評価委員会では、「プログラム評価・改善実施手順」を定め、教育プログラムの評価・改善を進める上での体制整備が行われた。2020 年 1 月 22 日に中央教育審議会大学分科会より示された「教学マネジメント指針」においても、教育プログラム評価・改善をエビデンスに基づき、実質的に実施していくことが強く求められており、徳島大学でも実態を把握し、全学的な支援及び情報提供、組織間の連携等を進めることが必要であるといえる。2020 年度には、各学部等のプログラム評価委員会を対象に、教育プログラムの評価・改善に関する課題やニーズを把握するための調査を実施した。その結果、プログラム評価の意義や必要性に関する理解を共有すること、技能領域や態度領域も含めて客観的に評価するための具体的な方法とエビデンスを整理することが、多くの学部学科等で必要であることが明らかになった。

これらの背景のもと、各学部等の教育プログラムの評価・改善について、客観的な指標に基づいた透明性のある評価、改善の計画を作成することを目的とした教育の質保証 FD を計画した。2023 年度は、2021 年度より継続的に実施している歯学部において、担当者と打ち合わせを行い、教務委員やプログラム評価委員を対象としたワークショップを実施した。

### 3.2 概要

教育の質保証 FD の具体的な内容は、高等教育研究センター教育改革推進部門教員と学部等の教育プログラム評価に関わる担当者が、プログラム評価の取り組みを確認し、当該学部等が目指す取り組みの実現に向けて課題や対応策等を検討する。打ち合わせを重ねながら、部門スタッフが必要な情報を提供し、当該学部等の文脈に合わせた実現可能な評価・改善計画を作成するものである。

### 3.2.1 歯学部

#### ■ 打ち合わせ

2023 年 5 月 12 日 (金)

#### ■ 場所

歯学部第 1 会議室

#### ■ 参加者

日野出大輔教授, 坂口幸久係長, 数藤愛子係員

#### ■ 概要

歯学部では 2021 年度から本 FD の取り組みとして、教育プログラムの評価改善に取り組んでいる。2021 年度は、教育プログラム評価を行う上で重要な指標の 1 つとなる学生の学習成果を可視化・測定するためのアセスメント計画「カリキュラムアセスメントチェックリスト (以下、CACL)」の作成を行った。2022 年度は、作成した CACL の問題点等を検討し、学生の学習到達度を測定するための評価基準と評価資料を具体的にした「マイルストーンルーブリック」を作成した。2023 年度は、作成した「マイルストーンルーブリック」や CACL を活用して、実際にいくつかの到達目標に対して評価を行い、今後の改善策を検討するための「歯学部教育プログラム評価のためのワークショップ」を開催した (図 1)。

ワークショップは、2023 年 6 月 9 日 (金) に歯学部講堂にて実施し、歯学部の教務委員会委員、プログラム評価委員会委員、FD 委員会委員が参加した。はじめに、教育改革推進部門より、教育プログラム評価・改善に関する政策、これまでの本学の取り組み、及び歯学部における取り組みと本ワークショップの位置づけを解説した。続いて、歯学科はコンピテンス・コンピテンシーの 2 及び

4 について、「初学者・教養 (レベル 1-2)」、「基礎歯学 (レベル 3)」、「臨床 (レベル 4-6)」の 3 つのレベル、口腔保健学科はディプロマ・ポリシーの 1 及び 2 (1) について、「基礎・教養 (レベル 1-2)」、「臨床 (レベル 3)」の 2 つのレベルで、2022 年度のデータをもとに評価を行い、「教育プログラム評価・自己点検シート」を作成した。作成したシートは図 2 の通りである。今後は、シートの④, ⑤, ⑥に挙げられている改善策を整理し、着手できる項目から対応する予定である。

### 3.3 成果と課題

2021 年度からの取り組みを継続し、教務委員会委員やプログラム評価委員会委員などの教員とともに、成績やアンケート結果などの客観的な複数のデータをもとにして、教育プログラムレベルでの評価を行うことができた。また、今回のワークショップでは、参加者同士で議論しながら取り組んだことで、ただ評価を行うだけでなく、評価の過程で、カリキュラムの課題、授業の課題、授業の評価に関する課題なども可視化され、関係者間で共有することができた。この取り組みは、おそらく本学では他に例のないことであると考えられる。昨今は、教育の内部質保証が求められていることから、さまざまな評価を行う必要があり、評価疲れが指摘されている。今回のワークショップの一番の成果は、自己点検シートを完成させるという作業ではなく、評価活動を通して関係者と意見交換が行われ、成果や問題点に対する共通認識を持つことができたことである。これは、教育の内部質保証において極めて重要なことであ



図 1 ワークショップの様子

教育プログラム評価・自己点検シート(令和4年度・歯学部 歯学科)

CC4:患者に対して敬意と思いやりを持って、科学的根拠に基づく適切な安全な歯科医療を実践できる。

①プログラムのレベル	②目標達成に関する評価	③評価の根拠	④評価方法に関する改善	⑤今後の教育プログラム・CCの改善に向けた対応・方針	⑥その他の対応事項・課題
初学者・教養 (レベル1-2)	●	<input type="checkbox"/> シャドーイングのレポート提出率100%: [ ]で達成 <input type="checkbox"/> チーム医療入門の課題レポート評点平均80%以上: [ ]で達成 <input type="checkbox"/> ラーニングライフ <input type="checkbox"/> Q2目標25% [ ]で達成 <input type="checkbox"/> Q17目標25% [ ]で達成 いずれの項目も達成しているので評価を [ ]	[ ]	[ ]	[ ]
基礎歯学 (レベル3)	●	<input type="checkbox"/> 基礎系科目(解剖学第一 [ ]、解剖学第二 [ ]、生理学 [ ]、生化学 [ ]、病理学 [ ]、病原微生物学 [ ]、薬理学 [ ]、歯科理工 [ ]、衛生公衆衛生学 [ ]) <input type="checkbox"/> ラーニングライフ(3年生)(Q2:分析力や問題解決能力、Q17:必要な情報を収集・取捨選択する能力)・入学時より増えたと回答した学生 50%以上いずれも [ ]以上 おおむね GPC の目標は達成できている。アンケートも目標値の達成できている。	[ ]	[ ]	[ ]
臨床 (レベル4-6)	●	<input type="checkbox"/> 歯科臨床科目・各科目 GPC2 以上 [ ] <input type="checkbox"/> 総合科目・GPC2 以上 [ ] <input type="checkbox"/> 卒業時アンケート(Q2:分析力や問題解決能力、Q17:必要な情報を収集・取捨選択する能力)・入学時より増えたと回答した学生 75%以上 [ ] <input type="checkbox"/> [ ] <input type="checkbox"/> 関連医学科目・各科目 GPC2 以上・該当学年学期末 [ ] <input type="checkbox"/> 総合科目・各科目 GPC2 以上 [ ] <input type="checkbox"/> 蔵本地区/学部連携 PBL チュートリアル課題レポート・評点平均 80%以上・該当学年学期末 [ ] <input type="checkbox"/> 歯学 CBT の合格率・90%以上 [ ] <input type="checkbox"/> 歯学 OSCE の合格率・90%以上 [ ] <input type="checkbox"/> 臨床実習(修了時試験・Post-CCPX)の合格率・90%以上 [ ] <input type="checkbox"/> 臨床実習・GPC2 以上 [ ] <input type="checkbox"/> 国家試験の合格率・70%以上 [ ] GPC と合格率などの目標はおおむね達成できている。アンケートの目標値も達成できている。	[ ]	[ ]	[ ]

※注：実際の評価値や改善策等に関する記載内容は公開できないため隠している

図 2 教育プログラム評価・自己点検シート (歯学科 CC4 の例)

り、評価への取り組みを作業として捉えるのではなく、有益な活動として捉えている事例である。今後は、徳島大学の他の学部にも普及していくことを期待している。

また、今回、歯学部において多くの関係者が関わり、ワークショップを実施することができた理由には、歯学部の担当者である日野出教授、河野教授、運営の支援をしてくれた歯学部学務係の職員の尽力が不可欠であったといえる。2024 年度も、引き続き今回のワークショップで明らかになった課題や、試行的に実施する評価で見えてきた問題点などを検討し、少しずつ教育プログラムの改善につなげていく予定である。(吉田 博)

4. 教育力開発コース

教育力開発コースは、授業設計、授業の実施・改善、教育活動を振り返り、自身の目標を明確にし、改善につなげるといった一連のプロセスを支援するものである。徳島大学においてはこれらの教育活動を重視しており、学外より講師または准教授採用後 1 年以内の教員、及び、学内で助教から講師または准教授昇任後 1 年以内の教員を対象

に実施している。対象者はまずステップ 1「授業設計ワークショップ」を受講した後、ステップ 2「授業実践の振り返り」または「授業参観・授業研究会」のいずれかを受講することが定められている。加えて受講後 3 年以内に、ステップ 3 である「ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ」を受講することが望ましいとしている。

4.1 授業設計ワークショップ

4.1.1 目的

授業設計ワークショップは、授業設計とアクティブ・ラーニングの手法について学び、模擬授業・授業検討会を行うことで、実践的に知識やスキルを修得するものである。本ワークショップの目標は次の 4 つである。

- ① FD 活動の理念、活動計画を理解することができる。
- ② 授業を計画、実施し、評価する方法を体得することができる。
- ③ 授業研究の仕方を理解し、実践することができる。
- ④ FD 参加者同士の仲間づくりができる。

2017 年度からは参加者がワークショップの講義部分をビデオ教材で事前に学習してからワークショップに参加する、反転授業形式を導入している。また今年度は 2019 年度以来、4 年ぶりに対面形式で全てのプログラムを実施した。

#### 4.1.2 概要

##### ■開催日程

2023 年 8 月 28 日 (月)・29 日 (火)

##### ■会場

常三島キャンパス フューチャーセンター (地域創生・国際交流会館 5 階)・教養教育 4 号館

##### ■対象者

本ワークショップは四国地区大学教職員能力開発ネットワーク (SPOD) へ開放している。今年度は 2019 年度以来、学外の参加者の参加を認めており、今年度は SPOD 加盟校から 2 名が参加した。学内の対象者は、教育力開発コースの対象者、2021 年度に実施した「授業設計ワークショップ」の欠席者、推薦を受けた者 (助教及び、教授等) としている。ただし、病院及び、プロジェクト採用等の場合は除いた。また、①学外で同様の研修を受けた場合、②担当する授業がない場合、③診療業務を主に担当している場合、についても参加を免除した。

##### ■参加者

2023 年度の参加者は徳島大学所属の教員 18 名と SPOD 加盟校所属の教員 3 名、合計 21 名である。詳細は以下に示す通りである。

##### 【学内教員】

氏名	所属	職名
KAISER MEAGAN RENEE	総合科学部	准教授
武 学穎	総合科学部	准教授
兵田 愛子	総合科学部	准教授
船本 雅文	医学部	准教授
布川 朋也	医学部	講師
内田 貴之	医学部	講師
常松 貴明	歯学部	准教授
安藤 英紀	薬学部	准教授
中尾 允泰	薬学部	講師

KARANJIT SANGITA	薬学部	講師
堀越 一輝	理工学部	講師
國川 慶太	理工学部	講師
阪本 鷹行	生物資源産業学部	講師
山田 晃嗣	生物資源産業学部	講師
関 陽介	高等教育研究センター	准教授
森 博康	先端酵素学研究所	講師
時実 悠	ポスト LED フォトニクス研究所	講師

##### 【学外教員】

氏名	所属	職名
和仁 里香	徳島文理大学	教授
石井 悠加	四国大学	講師
小西 葉子	高知大学	助教

##### ■運営メンバー

運営メンバーは、理事 (教育担当)、FD 委員会委員長、FD 委員会委員を含めた教員 13 名、学務部教育支援課教育支援係職員 5 名の計 18 名であり、詳細は次の通りである。

氏名	所属	職名
長宗 秀明		副学長
齊藤 隆仁	教養教育院	副理事
渡部 稔	教養教育院	教授
南川 慶二	理工学部	教授
赤川 貢	医学部	教授
富永 辰也	医学部	教授
日野出大輔	歯学部	教授
立川 正憲	薬学部	教授
三戸 太郎	生物資源産業学部	教授
吉田 博	高等教育研究センター	准教授
飯尾 健	高等教育研究センター	助教
塩川奈々美	高等教育研究センター	助教
三宅 恵美		非常勤講師
瀬尾亜希子	教育支援課教育企画係	係長
三原あおい	教育支援課教育企画係	特任事務員
天羽 萌	教育支援課教育企画係	事務補佐員
岩倉 恭子	教育支援課教育企画係	事務補佐員
山崎 一恵	教育支援課教育企画係	事務補佐員

## ■内容

2 日間にわたり、表 2 の通りプログラムを実施した。今年度は 2019 年度以来、全てのプログラムを対面形式で実施した。

## ■全体の流れ

### [1 日目]

「(1) オリエンテーション」では、大学教育改革の流れや、本学の教育改革について説明を行った。とくにアフターコロナの授業を見据え、オンライン授業で培ったノウハウをどう対面授業に活かすか、も交えて授業設計について気を付けるべき点を紹介した。

続いて、授業設計ワークショップ全体の流れや教育力開発コースの意図や内容を説明し、昨年度の参加者の声を紹介して、参加者の動機づけを行った。

「(2) アイスブレイク」では、参加者同士がお互いについて知ることができるよう、テーマにもとづいた自己紹介を行うというワークを実施した。

「(3) ワーク 自身の教育理念」では、教育活動を行う上で、それぞれの教員が大切にしていることを整理しながら、教育理念を意識することの大切さを説明し、「ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ」の紹介ならびに教育理念を整理するためのミニワークを行った。

「(4) ワーク 授業設計の基本」では、事前にビデオ教材による講義「アクティブ・ラーニング」と「学習評価の仕方」を視聴した上で参加する、反転授業形式で実施した。教育改革推進部門のホームページで講義ビデオを公開し、同時に簡単なクイズに取り組むことができるようにした。

ワークでは、これらの動画を踏まえた「知識構成型ジグソー法」を用いて、授業設計において注意すべき点についてグループで思考を深めるとともに全体への発表・共有を行った。

「(5) 講義・ワーク 授業計画」では、シラバスや授業計画書の書き方について説明があり、徳島大学が定める「シラバス作成ガイドライン」が紹介され、目標設定の仕方や、その記述方法が解説された。続いて、これまでの講義やワークを踏まえて、参加者があらかじめ作成したシラバス、授

業計画書の検討・修正を行った。その後、参加者がペアとなりシラバスおよび授業計画書の相互チェックを行った。

### [2 日目]

「(6) 模擬授業実施 (グループで実施)」では、参加者や運営メンバーがグループごとに各教室に分かれて、参加者全員が模擬授業を実施した。各グループには FD 委員、高等教育研究センターの教員がコンサルタントや司会者として入り、支援を行った。はじめに参加者が模擬授業を実施する授業のシラバスと授業計画書を説明し、その中からある一部分の 15 分間を切り取り、その模擬授業を実施した。グループの参加者は学生役として模擬授業に参加した。その後、授業検討会を行い、参加者がお互いに良い点、改善点について話し合いながら、授業を良くするために取り組むことなどを話し合った。

「(7) 模擬授業の振り返り」では、模擬授業に対する全体的なコメントがあり、その後参加者がワークシートをもとに自身の模擬授業を省察し、グループのメンバーからもらった意見をまとめ、今後のアクションプランを作成した。その後、グループ内で共有を行った。最後に、数名の参加者から、研修で学んだことやアクションプランを紹介してもらい、全体での共有を行った。

「(8) 教育力開発コース概要」では、《授業設計ワークショップ》⇒《授業実践の振り返り》or《授業参観・授業研究会》⇒《ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ》と続く「教育力開発コース」の概要や意義が説明された。

「(9) プログラムのまとめ」では、ワークショップ全体に対する講評があり、終わりの言葉によって締めくくられた。修了証書は参加者に当日授与した。

## 4.1.3 アンケート結果

ワークショップ終了後に参加者 21 名を対象にアンケートを実施し、参加者全員から回答を得た。図 3 にアンケート結果の一部を示している。また、自由記述の代表的な回答は以下の通りである。

(1) 現在のあなたにとってレベルアップが必要なスキル・知識は何ですか。



表 2 授業設計ワークショップ  
**授業設計ワークショップ日程 (第 1 日目)**

日時：2023 年 8 月 28 日 (月)

場所：常三島キャンパス 地域創生国際交流会館 フューチャーセンター

時刻	内 容	講師・担当者	備 考
12:30-12:50	・受付 (地域創生国際交流会館フューチャーセンター) ※ 12:45 までにお集りください		11:00AM 徳島市に「大雨警報 かつ暴風警報」または「洪水 警報かつ暴風警報」が出て いたら中止
12:50-13:20	(1) オリエンテーション ・はじめに (副学長より挨拶) ・大学教育改革の流れ ・研修のねらいと意義	吉田 博(進行) 副学長(教育担当) 長宗 秀明 FD委員会委員長 齊藤 隆仁	フューチャー センター
13:20-13:50	(2) アイスブレイク「課題・目標設定」 ・参加者自己紹介・交流	塩川奈々美	フューチャー センター
13:50-14:00	休憩		
14:00-15:00	(3) ワーク「自身の教育理念」 ・授業で大切にしていること ・育成したい学生像 ・実践したい教育	吉田 博	フューチャー センター
15:00-15:10	休憩		
15:10-16:10	(4) ワーク「授業設計の基本」 ・アクティブ・ラーニングの理論と効果 ・成績評価の意義・方法 ・学生の学習を促す授業方法	飯尾 健	フューチャー センター
16:10-16:20	休憩		
16:20-17:45	(5) 講義・ワーク「授業計画」 ・シラバス・授業計画書の書き方 ・シラバス・授業計画書の修正 ・2 日目の模擬授業の進め方について	塩川奈々美 スタッフ全員	フューチャー センター
18:00-20:00	情報交換会 (任意参加)	吉田 博	

**授業設計ワークショップ日程 (第 2 日目)**

日時：2023 年 8 月 29 日 (火)

場所：常三島キャンパス 教養教育 4 号館 202 教室他

時刻	内 容	講師・担当者	備 考
9:00-9:30	・集合、模擬授業準備 (教材印刷が必要な場合は 9:00 集合)	スタッフ	集合：教養教育 4 号館 202 教室
9:30-12:00	(6) 模擬授業実施 (グループで実施) ・FD 委員紹介、流れの確認 【模擬授業の流れ】(1 人 30 分×4 人 (休憩適宜)) ・シラバス・授業計画書等の紹介 (5 分) ・模擬授業の実施 (15 分) ・授業検討会 (10 分) →チェックリストをもとによかった点、改善点等を 検討する。	各班司会： FD 委員 ワーク支援： スタッフ全員	< 模擬授業実施手順 > 教室：各班グループ 部屋へ移動
12:00-13:00	休憩 各自で昼食		
13:00-13:40	(7) 模擬授業の振り返り ・模擬授業検討会を受けて授業の改善点 ・今後のアクションプラン	吉田 博	教養教育 4 号館 202 教室
13:40-14:00	(8) 教育力開発コース概要 ・教育力開発コースの意義・内容	飯尾 健	教養教育 4 号館 202 教室
14:00-14:30	(9) プログラムのまとめ ・講評 ・修了証書授与 ・アンケート ・おわりの言葉	吉田 博(進行) 副学長(教育担当) 長宗 秀明 FD委員会副委員長 木戸口善行	教養教育 4 号館 202 教室

- ・ 学生とのコミュニケーション
  - ・ アクティブ・ラーニングの方法
  - ・ 学生の集中力・動機づけを高める方法に関する知識
  - ・ 話し方、授業内容の要点をまとめ伝える技術
  - ・ スライドの作成方法
  - ・ シラバス作成・授業計画作成のスキル
  - ・ LMS 等 ICT に関する知識
- (2) 参加して良かったと思われる点を、具体的にお書きください。

- ・ シラバスや授業計画の重要性と作成方法を学ぶことができた
  - ・ 模擬授業等を通じて他の教員との交流ができた
  - ・ 自分の授業に対するコメントがもらえた
  - ・ 自分の授業を客観的に見直す機会ができた
  - ・ 他の教員の授業を見ることで参考になった
  - ・ 授業に対するモチベーションが上がった
- (3) 研修をよりよいものにするために改善すべき点があれば、具体的にお書きください。

- ・ グループワークの時間が短かった
- ・ アクティブ・ラーニング等の手法についてまとまったビデオがあればよい

- ・ 模擬授業で、グループ人数の都合で早く終わったグループは他のグループの見学できればよい
- (4) その他、お気づきの点があればお書きください。
- ・ 科研の申請書提出と重なってしまったので、実施時期をずらしてほしい
  - ・ 新任教員以外にも多くの先生方がこのような研修に参加できればよい
  - ・ 可能であれば木・金開催にして、金曜日に情報交換会を行ってほしい

#### 4.1.4 成果と課題

今回のアンケート結果から、「授業設計ワークショップは自分の業務に生かせる内容だった」「授業設計ワークショップの目的は明確に設定されていた」「ワークショップは全体的に満足できるものだった」「ワークショップは期待を上回る内容だった」「受講したことによって教育への取り組み方が改善されると思う」という設問において全ての回答者から肯定的な回答が寄せられた。ほかの設問においてもほぼ全員から肯定的な回答が得られた。また自由記述からも、シラバスや授業設計に関する知識を習得できたこと、模擬授業を通

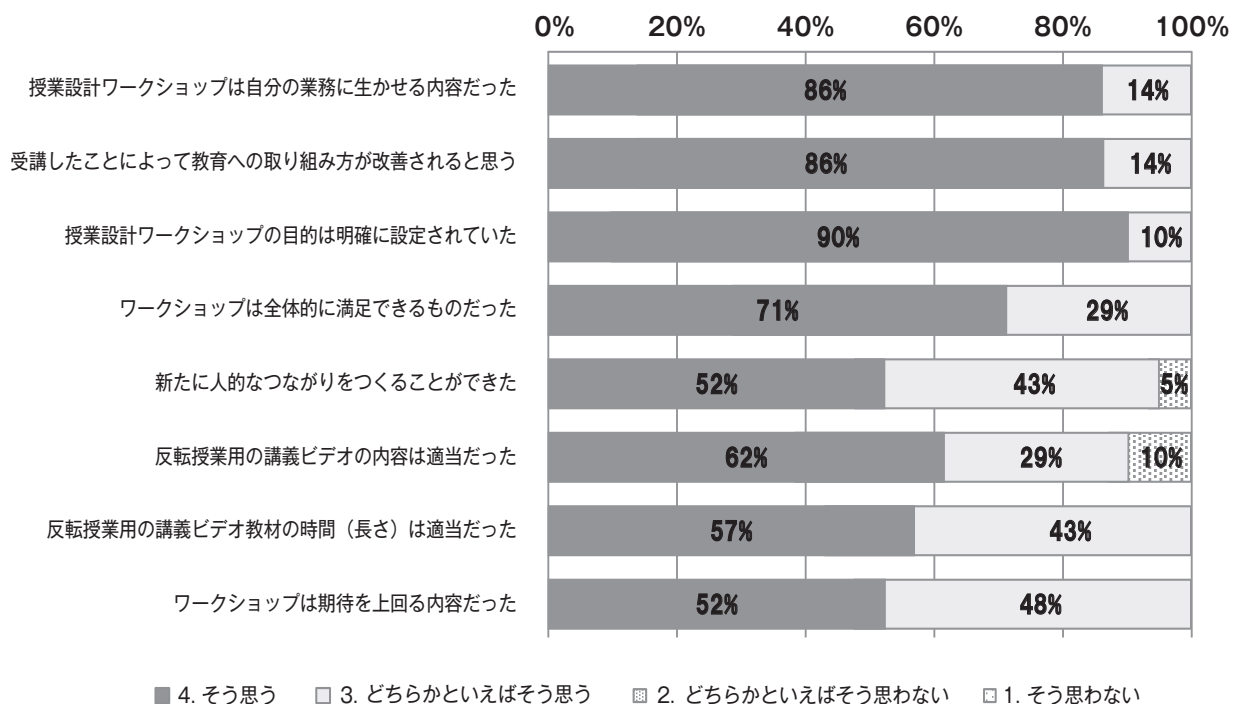


図 3 授業設計ワークショップアンケート結果



構築されているか否かの確認を行う。その後、全学の FD 委員会において、「③授業実践の振り返りシート」の内容について確認し、問題がない場合に承認を得る。この承認をもって本プログラムの修了とする。

#### 4.2.3 実施報告

2023 年度は表 3 の通り、9 名の教員が実施し、全員が FD 委員会において承認を受けた。

(塩川奈々美)

### 4.3 授業参観・授業研究会

#### 4.3.1 目的

授業参観・授業研究会は、個々の教員の実情に沿った具体的で日常的な FD を目指しており、授業の把握、授業の改善、参加者間での授業技術の共有を目的としている。

#### 4.3.2 授業参観・授業研究会の流れ

授業参観・授業研究会は、はじめに対象教員授業を参観し、授業の様子を撮影・録画し、学生アンケート（授業の理解度、良かった点、改善して欲しい点、先生へのメッセージを問う）を実施する。この授業参観・授業研究会は学部 FD との共催となるため、全学案内を出すことで対象教員所属学部内外からの参観者・研究会参加者が集まる場合もある。授業参観の際には高等教育研究センター教育改革推進部門の教員は、授業のポイントや気になる点などを記録する（授業内容のまとめ

り、時間経過、特筆すべき発言や出来事など）。授業参観終了後、続いて授業研究会を実施する（対象教員の都合により別日に実施される場合もある）。ここでは、対象教員と授業を参観した教員が、授業内容について議論を行う。この中で授業の様子を振り返りつつ、学生アンケートの結果を確認し、うまくいっている点や工夫されている点を共有し、困っている点を解決するためのアイデアについて意見交換を行う。

#### 4.3.3 実施報告

2020 年度以降、授業を実施する際は新型コロナウイルス感染症対策が講じられ、3 年が経過したが今なおオンライン授業は実施されている。授業参観・授業研究会も同様にクラスター（集団）感染が起りやすい、密閉空間、密集場所、密接場面（3 密）を避けることが求められる中での実施となった。

2023 年度に実施された授業参観・授業研究会 3 件のうち 1 件はオンラインで行われたが、うち 2 件は対面での実施となった（表 4）。オンライン授業においては解説内容に対する学生の理解に配慮した授業が行われ、対面の授業においても、教員による積極的な学生への働きかけにより理解度の把握が試みられ、アクティブ・ラーニングを意識した授業運営の様子が認められた。

授業参観後の授業研究会においては、対象教員が所属する部局からの参観者が引き続き研究会にも参加したことで、多くの意見が共有され、活発

表 3 授業実践の振り返り修了者

承認日	学部・学科等	氏名	授業名	評価者 (FD 委員)
6 月 13 日	生物資源産業学部	山村 正臣	森林代謝学	三戸 太郎
6 月 13 日	生物資源産業学部	石丸 善康	生物情報処理学	三戸 太郎
9 月 12 日	歯学部	廣島 佑香	口腔の感染症	日野出大輔
9 月 12 日	生物資源産業学部	林 順司	フードサイエンス	三戸 太郎
11 月 14 日	理工学部	國川 慶太	技術英語入門	木戸口善行
11 月 14 日	高等教育研究センター	関 陽介	情報科学入門	齊藤 隆仁
2 月 13 日	総合科学部	武 学穎	経営学	豊田 哲也
2 月 13 日	総合科学部	兵田 愛子	日本国憲法	豊田 哲也
3 月 12 日	薬学部	安藤 英紀	薬剤学 1	立川 正憲

表 4 授業参観・授業研究会による修了者

実施日	学部・学科等	氏名	授業名	授業方法
5月9日	医学部	原田 武志	血液疾患と免疫・ウイルス	対面
5月17日	生物資源産業学部	鬼塚 正義	バイオ医薬品生産工学	対面
5月25日	総合科学部	津村 秀樹	学習・言語心理学	オンライン

な議論が行われた。高等教育研究センターの担当者以外にも教員の参加があったことで、様々な視点からの意見が共有され、対象教員にとっても授業実践の振り返りが促進されたようである。

(塩川奈々美)

#### 4.4 ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ (TPWS)

##### 4.4.1 背景

徳島大学では2011年度より実質的なFDの取り組みを進めるため、「ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ (以下、TPWS)」を開催している。2018年度～2021年度は、参加希望者が2名に達しないことや、新型コロナウイルス感染症への対応からワークショップが実施できていなかった。

しかし、2022年度以降は再び複数の参加希望があり、2023年度は3名が参加して、2011年度以降累計で32名がTPWSに参加している。参加者の満足度は非常に高く、教育改善に有効であることが示されている。

##### 4.4.2 概要

###### ■開催日程

2023年9月6日(水)～9月8日(金)

###### ■会場

教養教育6号館2階201講義室ほか

###### ■参加者

氏名	所属	職名
岡田 麻里	香川県立保健医療大学	准教授
森口茉莉亜	高等教育研究センター	助教
塩川奈々美	高等教育研究センター	助教

###### ■運営メンバーおよびメンター

氏名	所属	職名
齊藤 隆仁	教養教育院	副理事
吉田 博*	高等教育研究センター	准教授
飯尾 健	高等教育研究センター	助教
瀬尾亜希子	学務部教育支援課	係長
岩倉 恭子	学務部教育支援課	事務補佐員
天羽 萌	学務部教育支援課	事務補佐員

\*はメンター及びスーパーバイザー担当教員

###### ■内容

3日間にわたって表5のプログラムを実施した。TPWSの様子は図5の通りである。



図5 TPWSの様子

表 5 ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ  
第 1 日 (2023 年 9 月 6 日・水曜日)

時刻	内 容	備 考
11:30-12:00	受付	
12:00-12:30	オリエンテーション ・はじめに (全学 FD 委員会委員長よりあいさつ) ・自己紹介 (スタッフ・参加者) ・ティーチング・ポートフォリオとは	201 講義室
12:30-13:30	アイスブレイク 昼食 ・初校へ向けての共通アドバイス ・メンター, 参加者との交流	201 講義室
13:30-15:00	ティーチング・ポートフォリオ・チャートの作成	201 講義室
15:00-16:00	第 1 回 個人ミーティング 各自メンタリングルームへ移動	ミーティングルーム
16:00-17:00	TP 作成作業	201 講義室

第 2 日 (2023 年 9 月 7 日・木曜日)

時刻	内 容	備 考
9:00-10:00	TP 作成作業	201 講義室
10:00-11:00	第 2 回 個人ミーティング 各自メンタリングルームへ移動	ミーティングルーム
11:00-12:00	TP 作成作業	201 講義室
12:00-13:00	意見交換 昼食 ・第 1 稿に共通するコメントと情報共有 ・第 2 稿をまとめるにあたって	201 講義室
13:00-14:00	第 3 回 個人ミーティング 各自メンタリングルームへ移動	ミーティングルーム
14:00-17:00	TP 作成作業	201 講義室

第 3 日 (2023 年 9 月 8 日・金曜日)

時刻	内 容	備 考
9:00-10:00	TP 作成作業	201 講義室
10:00-10:30	第 4 回 個人ミーティング 各自メンタリングルームへ移動	ミーティングルーム
11:00-12:00	TP 作成作業	201 講義室
12:00-13:00	意見交換 昼食 ・第 3 稿をまとめるにあたって ・TP 披露の形式説明 ・TP の活用方法 (ワーク)	201 講義室
13:00-14:00	TP 作成作業 ・プレゼンテーションの準備 (A4 版・一枚程度)	201 講義室
14:00-15:00	プレゼンテーション準備	201 講義室
15:00-16:00	TP 披露・修了式 ・メンティーによるプレゼンテーション ・修了証授与 (全学 FD 委員会委員長より) ・記念写真 ・ワークショップを振り返って	201 講義室

#### 4.4.3 成果と課題

TPWS では、1 日目の夜に情報交換会を実施し (2022 年度は新型コロナウイルス感染症の影響を受け実施していない)、高等教育研究センター教育改革推進部門教員や学務部教育企画系の職員も情報交換に参加した。また、1 日目の午後を実施する「ティーチング・ポートフォリオ・チャート (以下、TP チャート)」の作成の際に、TP チャートのみを作成するワークショップ「TP チャート作成ワークショップ」を同時開催したことで、TP チャート作成時には、教員 3 名が加わった。さらに、TP の作成経験がある FD 委員会委員長も情報交換会を含む一部のプログラムに参加することで、多様な参加者と情報共有が行われ、充実した WS となった。

WS 終了直後に実施した参加者アンケートでは、WS の満足度、TP 作成の成果、運営スタッフに関するすべての設問で肯定的な回答が得られた。また、自由記述では、「改めて自分の根底にあるものを見つめることができ、すっきりとした気持ちでした。」「色々と話をさせてもらって、話を深掘りしてもらって良かったです。」「ぼんやりとしていた自身の教育理念を明確に捉えることができた。業務や大学教育に対する自信のモチベーションがどこにあるのか、改めて考えるきっかけになったと思う。」という意見からは、TP を作成することで参加者自身の教育理念を可視化し、今後の教育活動に対する動機づけにつながっていることが分かる。また、「関心の高い参加者同士の交流はとても楽しく、有意義でした。」「共同で取り組む仲間がいることが心強かったです。違う分野の取り組みや理念をきけて、刺激をうけました。」という意見からは、WS 全体を通して重要な点として位置づけている、参加者同士の情報交換や交流が有意義であったことが分かる。

今回は将来的に WS のメンターを担当することになる高等教育研究センター教育改革推進部門教員の兼務教員が TP を作成したことで、今後は WS の定員を増加することができ、メンター同士のやり取りもできるようになり、さらに質の高い WS が提供できることが期待される。また、「TP チャート作成ワークショップ」の参加者アンケー

トにおいて「機会があれば TP を作成したい」と 2 名の教員が回答していることから、「TP チャート作成ワークショップ」を同時に開催することも意義があると言える。(吉田 博)

### 5. 授業について考えるランチセミナー

#### 5.1 目的

「授業について考えるランチセミナー」は、アクティブ・ラーニングや新しい教育技術、教育ツールを全学的に普及していくために、教職員、大学院生を対象に教授学習に関するテーマでマイクロレベルの FD プログラムを計画的に実施するものである。また、四国地区大学教職員能力開発ネットワーク (SPOD) の FD プログラムとして、四国地区にも開放している。

本セミナーの位置づけとして、「気軽に参加でき、かつ充実した情報を提供する」というものである。すなわち、他の業務や研究を行いながら気軽に参加することができるとともに、教員による実践事例や学生の声を紹介するといった、授業改善に役立てられる有益な情報を提供・共有できることを目指したものである。この位置づけのもとに、今年度も引き続き、月 2 回、昼休みの 12 時 5 分から 50 分まで、同じテーマで週ごとに異なる内容のセミナーを Zoom によるオンラインで実施した (図 6)。

また今年度も引き続き、高知大学学び創造センターと共同で開催という形で、今年度も同センターの教員が本セミナーの企画・実施に携わった。同時に広報も同センター、ならびに SPOD を通じて、徳島大学・高知大学を含めた四国地区の幅広い大学の教員へ広く周知を行った。

#### 5.2 概要

表 6 に示した通り、10 のテーマで計 20 回のセミナーをオンラインで実施し、延べ 1075 名の教職員、大学院生、学部学生が参加した。

#### 5.3 成果と課題

プログラム終了直後、参加者を対象にアンケートを実施し、延べ 362 名から回答を得た。アンケートの設問のうちプログラムの成果に関する 4 件法

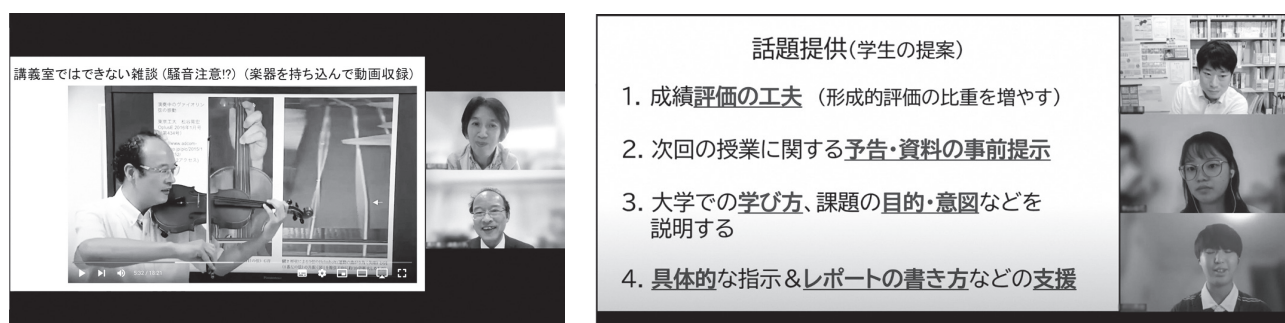


図 6 「授業について考えるランチセミナー」実施風景

表 6 2023 年度「授業について考えるランチセミナー」実施状況

テーマ	講師	実施日	参加者数
1 合理的配慮の必要な学生に対する授業実践	杉田 郁代 (高知大学学び創造センター)	4月13日	66名
		4月20日	60名
2 オンライン授業におけるアクティブラーニング実践	塩川奈々美 (徳島大学高等教育研究センター)	5月11日	46名
		5月18日	45名
3 形成的評価とフィードバックの方法	飯尾 健 (徳島大学高等教育研究センター)	6月8日	57名
		6月15日	50名
4 大学の授業と著作権	高畑 貴志 (高知大学学び創造センター)	7月13日	53名
		7月20日	43名
5 授業時間外学習を促す授業計画の仕方	吉田 博 (徳島大学高等教育研究センター)	9月14日	37名
		9月21日	36名
6 合理的配慮の必要な学生に対する学生支援実践 (アカデミックアドバイジング)	杉田 郁代 (高知大学学び創造センター)	10月12日	49名
		10月19日	51名
7 学生の学習を促す試験問題・レポート課題の作り方	吉田 博 (徳島大学高等教育研究センター)	11月9日	66名
		11月16日	60名
8 質的データの扱い方	塩川奈々美 (徳島大学高等教育研究センター)	12月14日	65名
		12月21日	51名
9 オンデマンド授業の作り方	高畑 貴志 (高知大学学び創造センター)	1月11日	53名
		1月18日	44名
10 アンケートの作り方・分析の仕方	飯尾 健 (徳島大学高等教育研究センター)	2月8日	81名
		2月15日	62名

のアンケート結果は図7の通りである。

アンケートの結果から、「今後の授業や教育活動に活かせる情報を得ることができた」、「本セミナーは今後の教育活動において有益なものであった」をはじめ、いずれの設問でも「とても当てはまる」と「どちらかと言えば当てはまる」を合わせた肯定的な回答について、90%を超える回答率を得ることができた。

同時に、アンケート内の本セミナーに参加して良かった点・有益であった点に関する自由記述では、「有用な情報や知見を得ることができた」「具体的な事例や取り組みを知ることができた」「授業で使えるツールや Tips を学べた」「学生の声を

聞くことができた」「他にも授業について考えている教員がいることが分かって嬉しい」といったものが見られた。本セミナーがオンラインで実施する利点を活かし、気軽に聴講できると同時に、有用な情報を得られるようセミナーを設計・運営していることが好意的に受け止められたことの表れと言える。また、合理的配慮が必要な学生への対応等、セミナーのテーマも教員のニーズに応えられたものであったことも理由であろう。

また、上述の通り本セミナーは SPOD 開放プログラムであり、徳島大学だけでなく高知大学・SPOD からの広報が行われ、徳島大学以外にも多数の教員が参加した。今年度は延べ参加者のうち



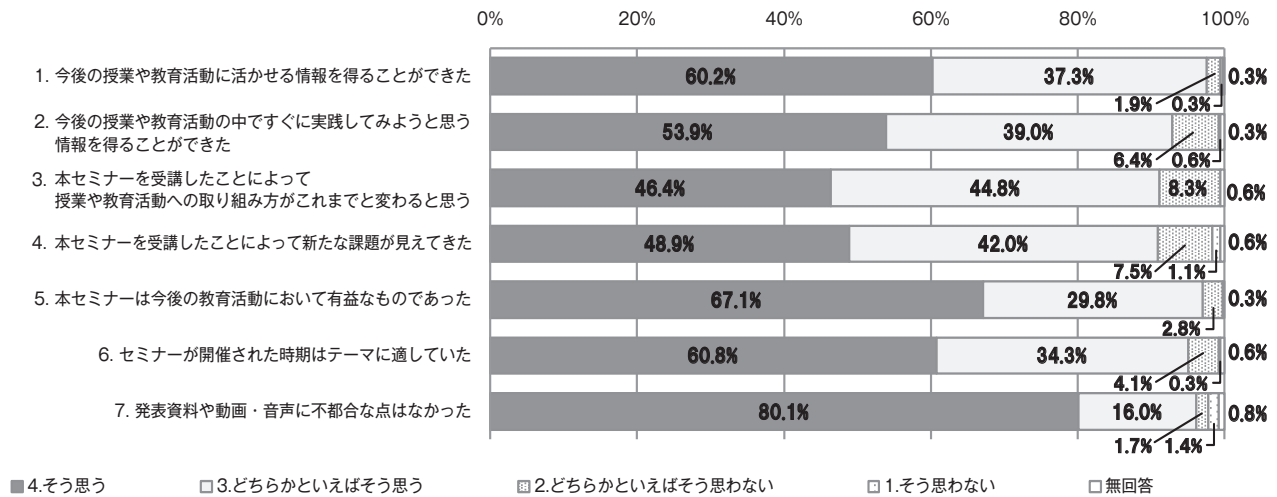


図 7 「授業について考えるランチセミナー」アンケート結果

徳島大学からの参加者はおよそ 5 割、また 2 割が高知大学の参加者で、残りの 3 割が他の SPOD 加盟校からの参加者であった。

今後はさらに共催の範囲を広げ、より多様なテーマを扱うとともに、幅広い大学から、より多くの教員の参加を目指したい。そのためには、さらなる授業づくりや大学教育に関する情報や実践事例を収集するとともに、広報にも力を入れていく必要がある。(飯尾 健)

## 6. SIH 道場担当者 FD

徳島大学の全学初年次教育プログラムである「SIH 道場」の授業担当者が、SIH 道場の設置背景となる大学教育再生加速プログラムの概要や自身が担当する SIH 道場の意義について理解を深め、SIH 道場の授業を担当するために必要な知識を修得することを目的に「2023 年度 SIH 道場担当者 FD」を開催した。

SIH 道場は、本学が 2014 年度に採択された文部科学省大学改革推進等補助金事業「大学教育再生加速プログラム (テーマ I : アクティブ・ラーニング)」の取り組みとして 2015 年度から導入された全学 1 単位必修の初年次教育プログラムである。内容はそれぞれの専門分野毎に異なるため、授業設計においては、i : 専門分野の早期体験、ii : ラーニングスキル (文章力・プレゼンテーション力・協働力) の修得、iii : 学修の振り返りという 3 つの目標を SIH 道場の共通設計項目として定め、

これを盛り込んだプログラムとなるよう設計されている。

授業担当者は原則として年度ごとに交代することになっているため、補助金期間中における本 FD は毎年度実施し、義務に近い形での参加を呼びかけてきた。2020 年度より、SIH 道場のマネジメントは SIH 道場の実施単位である各学部学科等に委ねられたため、本 FD への参加も任意である。しかしながら、全学の SIH 道場の実施状況を把握し、担当者から寄せられる課題を検討、情報共有の場を設けることで、各学部学科等の担当者の疑問を解消し、SIH 道場の意義を理解し、うて着手することができるようになるという点で重要な意味合いを持つ。本節では、こうした位置づけである「2023 年度 SIH 道場担当者 FD」の実施概要を報告する。

### 6.1 目的

本 FD の狙いは、授業設計を担当する代表者、また SIH 道場の授業担当者が SIH 道場の概要を把握するとともに、SIH 道場で役立つ教育手法やそのツールについて学ぶ機会を提供することにある。今年度のプログラムでは、参加者に SIH 道場の理念や授業設計における必須項目について解説し、授業設計コーディネーターや授業担当者の役割を確認したほか、SIH 道場の実施を支援する高等教育研究センター大学改革推進部門、学修支援部門 EdTech 推進班の教員による課題検討会を

開催し、SIH 道場の円滑な実施・運営の支援を目指した。本 FD の目標は次の 3 つである。

- ① SIH 道場授業担当者が当該学科の SIH 道場の背景やその詳細について理解し、SIH 道場の授業を担当するために必要な知識と技能を習得する。
- ② SIH 道場が OJT 型の FD であることや授業実施から振り返りまでのプロセスについて理解する。
- ③ 前年度の実施内容を情報共有し、振り返ることによって、オンライン実施の可能性も含めた SIH 道場の実施を検討し、今年度実施に向けた計画の見直しをもつ。

## 6.2 概要

### ■開催日時

2023 年 1 月 27 日 (金) 16:30-17:30

### ■会場：オンライン (Zoom)

### ■参加者

今年度の参加者は、常三島キャンパスならびに蔵本キャンパスの教職員 54 名である。

### ■運営メンバー

運営メンバーの詳細は次の通りである。

氏名	所属	職名
吉田 博	教育改革推進部門	准教授
飯尾 健	教育改革推進部門	助教
塩川奈々美	教育の質保証支援室	助教
金西 計英	学修支援部門 EdTech 推進班	教授
福井 昌則	学修支援部門 EdTech 推進班	准教授

### ■内容・全体の流れ

「SIH 道場の概要」では、SIH 道場の目標、内容、実施体制、授業設計の必須項目について解説を行い、高等教育研究センター各部門による支援や提供される教材 (テキスト・動画教材など) について説明した。続いて「SIH 道場運営・実施における課題検討会」と題して、2022 年度 SIH 道場授業担当者から寄せられた SIH 道場を運営・実施していく上で考えられた要望や課題を紹介した (表 7)。挙げられた課題として、オンラインで学生参加型のプログラムを実施する方法や、対面型

プログラムをオンラインに切り替えるための備え、SIH 道場の実施時期や期間の見直しについて過年度の SIH 道場授業担当者から寄せられた意見を紹介した。これらの課題に対し、SIH 道場の実施支援を担当する高等教育研究センター教育の質保証支援室の塩川奈々美助教による司会進行のもと、教育改革推進部門の吉田博准教授、飯尾健助教、学修支援部門 EdTech 推進班の金西計英教授、福井昌則准教授から、挙げられた課題に対し考えられる対応策や授業実施の Tips が紹介された。

## 6.3 成果と課題

FD 終了後に研修内容に関するアンケート調査を実施した (図 8, 回収率は 61.7% (n=29))。アンケート回答者のうち、参加者の職種は「教員 (SIH 道場授業担当者)」は 69%, 「教員 (授業設計コーディネーター)」は 28%, 「職員」は 3% であった。例年開催している本 FD への参加経験については 41% が「以前参加したことがある」と回答しており、過半数は「今年度が初めての参加」と回答した。

SIH 道場担当者 FD について質問した結果、「SIH 道場の目的の理解」や「SIH 道場における学生の到達目標の理解」「2023 年度の実施に向けて SIH 道場の授業設計や授業実施に役立つ情報が得られた」「FD の全体的な満足度」に対する肯定的意見は 90% を超えた。

本 FD に関する自由記述を見ても、

- ・ オンラインでアクティブ・ラーニングを進める Tips の資料をいただいた。
- ・ 背景や目的が理解できた。
- ・ アイスブレイクの方法は参考になりました。
- ・ オンライン授業において対面授業の内容をすべてカバーしようとしなくて良い、という説明があったこと。

など、FD の内容に満足いただけた声が窺えた。

SIH 道場の業務に関する FD として、概説的に SIH 道場に関する情報を共有することができたと言える。一方、「そもそもアクティブ・ラーニングとは何かについての議論が必要ではないかと思う。最初のころよりも一般化してしまい、なんと

表 7 2023 年度 SIH 道場授業担当者 FD

時間	内容	詳細項目	担当者
15 分	SIH 道場の概要	①目的・概要 ② 2022 年度の実施事例紹介	塩川奈々美
40 分	SIH 道場運営・実施における課題検討会	過去の実態調査において挙げられた SIH 道場運営・実施における課題点, 改善点等について担当者より解説を行う。	金西 計英 福井 昌則 吉田 博 飯尾 健
5 分	質疑応答		

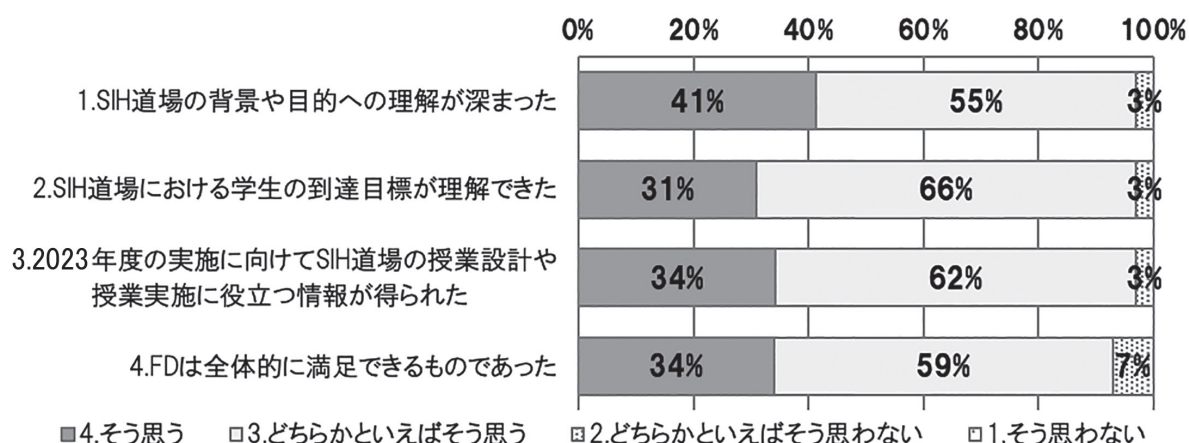


図 8 2023 年度 SIH 道場 FD アンケート結果 (n=29)

なくわかったつもりになってしまっているように感じる。」という FD プログラムに関する意見が挙げられたほか、「やはり onsite がよいですね。」のように、SIH 道場の実施方法について、対面での実施を希望する声が聞かれた。

2022 年度までの SIH 道場実施においては、感染症対策を講じなければならない状況にあった。対面授業での交流が制限されながらも、コロナ禍におけるオンライン授業の実施方法について広く教員にそのノウハウが蓄積されたことから、2023 年度では各プログラムの授業設計にあった形で SIH 道場が取り組まれたように思う。毎年実施している「SIH 道場の実施に関する実態調査」においてその取り組みの内容を把握し、次年度担当者への情報共有を図りたい。(塩川奈々美)

## 7. 大学教育カンファレンス in 徳島

### 7.1 目的

大学教育カンファレンス in 徳島は、教育活動の成果を検証し、教育実践研究を充実・発展させ

る機会となるよう、本学や他の高等教育機関で行われている教育実践の先駆的な取り組みを共有し、大学教育の質的向上に向けた努力の成果を確認することを目的としている。2005 年度から実施しており、今回で 19 回目を迎え、今回から SPOD 共通事業として位置づけている。2020 年度～2022 年度の 3 年間は、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、Zoom によるオンラインでの実施をメインとして実施してきた(2022 年度は一部に対面会場を設置)。2023 年度は 4 年ぶりに徳島大学常三島キャンパスの対面会場での開催をメインとし、一部のプログラムをオンラインで配信するハイブリッド形式で実施した。

### 7.2 概要と成果

#### ■開催日時

2023 年 12 月 26 日 (火) 9:00-17:30

#### ■会場

常三島キャンパス 地域創生・国際交流会館  
一部のプログラムでオンライン (Zoom) 配信

## ■概要

全体の参加者は学外からの参加者 41 名を含む、142 名であった。研究発表の件数は、口頭発表 16 件、ポスター発表 10 件、ワークショップが 2 件であり、特別講演が 1 件行われた (表 8)。

2023 年度は、新型コロナウイルス感染症の位置づけが変更されたことに伴い、対面会場での実施をメインとして実施した。さらに、口頭発表、特別講演、ディスカッション、及び発表者の希望によりワークショップ B については、オンライン配信を行うハイブリッド型で実施した。オンラインについては、コロナ禍の 3 年間と同様に、1 つのアカウント内に Zoom のブレイクアウトルーム機能を活用して、発表会場ごとにルームを設置し、参加者は自由にルーム間を移動できるように設定した。学外の発表者によるオンラインからの口頭発表も 1 件あり、参加者 142 名のうち、48 名がオンラインで参加し、学外からの参加もオンラインをメインとして開催していた過去 3 年とほぼ同程度であった。オンライン配信の運営についても、コロナ禍の経験を活かし、各会場には対面会場係やオンライン担当係を設置し、想定される対応事項について、担当者間で事前に動作確認を複数回実施した。

特別講演は、東京理科大学教育支援機構・教職教育センターの渡辺雄貴氏による「新しい対面授業を考える」と題した講演が行われた。「アフターコロナにおいて対面授業が再開される中で、単なる対面授業への回帰を避けるためにも、コロナ禍の経験を活かすことは重要であり、これからの大学教育や授業運営における示唆を得る機会となった。また、4 年ぶりに参加者を交えたディスカッションを実施した。ディスカッションは、「講演に対する質問や日常の教育活動を進める上で困っていること」をテーマとし、参加者がパソコンやスマートフォンなどから、web 上の質問・論点投稿フォームに、テーマに関する話題を挙げ、それに対してコメンテーターがアドバイスや実施のポイントなどをコメントした。コメンテーターは、特別講演講師の渡辺雄貴先生、徳島大学 FD 委員会委員長の齊藤隆仁先生、徳島大学医学部保健学科教務委員長の吉永哲哉先生が務めた。

## 7.3 カンファレンスの成果と今後の課題

2023 年度は、4 年ぶりの対面での実施に加え、一部のプログラムでオンライン配信を行うハイブリッド型で実施した。これは、コロナ禍の経験を活かした新しい取り組みであり、学外からのオンラインによる発表があったことや、コロナ以前と比較すると学外参加者が大幅に増加したことから、多様な参加ニーズに対応できたと考える。ポスター発表やワークショップでは、参加者同士の意見交換が活発に行われ、4 年ぶりに実施した情報交換会にも多くの参加があり、情報共有する姿が見られた。

カンファレンスでは、参加者を対象にカンファレンス終了後にアンケートを実施しており、52 名から回答を得た (回収率 37%)。カンファレンスの成果に関するアンケート結果を図 9、10 に示している。「a. 自分に必要な知識やスキルを身につけることができた」と「b. 参加したことによって業務の取り組み方が改善されると思う」、「c. カンファレンスの内容を十分に理解できた」という設問について、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」と回答した参加者が約 90% であり、過去 3 年間に引き続き肯定的な回答を得ている。これは研究発表の内容や特別講演のテーマ設定が参加者のニーズや興味に合致していること、研究発表者の発表が工夫されていたこと、特別講演のテーマや講師が魅力的であることが要因の一つにあると考える。魅力的な研究発表の投稿につなげるためにも引き続きカンファレンスのプレゼンスを高める努力をしていくことが必要である。「d. 他の参加者との交流を深めることができた」では、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」と回答した参加者は昨年度から増加したが、半数に留まっていた。これはオンラインで参加した場合は、他者とコミュニケーションをとることが容易でなく、交流できないことが要因であると考えられる。図 9「有益であったプログラムをすべて選択してください (複数選択)」では、すべてのプログラムで選択率が 80% 以上であることから、参加者にとって有益な内容を提供できていたと推察できる。「e. 特別講演の内容は興味深かった」という設問においても、参加した回答者 (未回答を除く)

表 8 第 19 回大学教育カンファレンス in 徳島プログラム

会期：2023 年 12 月 26 日 (火)

会場：教養教育 4 号館，地域創生・国際交流会館，一部オンライン配信を実施 (Zoom)

8:30 ~ 9:00	受 付			
9:00 ~ 9:10	開会挨拶：河野 文昭 副学長 (教育担当)			
9:15 ~ 10:15	<b>研究発表 I (口頭発表)</b>			
	<b>口頭発表 A</b> 座長：豊田 哲也 ＜4-202 講義室＞ A① 9:15 ~ 9:35 ■メタ認知による大学生の 深い学びの調査について  高等教育研究センター 金西 計英	<b>口頭発表 B</b> 座長：齊藤 隆仁 ＜4-203 講義室＞ B① 9:15 ~ 9:35 ■看護大学生の口腔保健行 動と口腔ケアへの関心、 臨地実習での体験  大学院医歯薬学研究部 桑村 由美 他	<b>口頭発表 C</b> 座長：富永 辰也 ＜4-204 講義室＞ C① 9:15 ~ 9:35 ■2 大学で共催する F D セ ミナーの開発と将来展望  高等教育研究センター 吉田 博 他	
	A② 9:35 ~ 9:55 ■ COVID19 禍の体験を生か した看護技術演習の ICT 教育  大学院医歯薬学研究部 安原 由子 他	B② 9:35 ~ 9:55 ■オンデマンド型授業にお けるアクティブラーニン グ型授業実践報告  高知大学 学び創造センター 杉田 郁代	C② 9:35 ~ 9:55 ■学生生活をテーマとした 交流型学生企画の成果と 課題  理工学部理工学科 社会基盤デザインコース 峯松 明日香 他	
	A③ 9:55 ~ 10:15 ■臨床系チュートリアル授 業のデジタル化推進にお ける課題  大学院医歯薬学研究部 関根 一光 他	B③ 9:55 ~ 10:15 ■Fostering Global Health Literacy: Infusing Vitality into Medical English Education  高等教育研究センター Tran Hoang Nam	/	
	10:15 ~ 10:30	休 憩		
	10:30 ~ 12:00	<b>ワークショップ A</b> ＜フューチャーセンター＞ ◆インプロ (即興演劇) を体験してみよう！ -Give your partner a good time!-  教養教育院 Gehrtz 三隅 友子 他	<b>ワークショップ B</b> ＜地域創生国際交流会館 301＞ ◆教員の自己成長を支える「しかけ」として のパターン・ランゲージ「実務家教員の ためのパターン・ランゲージ」を例として  社会構想大学院大学 先端教育研究所 山本 絢子 他	

<p>12 : 00 ~ 13 : 00</p>	<p style="text-align: center;">休 憩</p>
<p>13 : 00 ~ 14 : 00</p>	<p><b>ポスター発表</b>                      &lt; 4-302 講義室 &gt;</p> <p>座長 : 吉田 博</p> <p>P① 公開講座実習用教材への AI ペアプログラミングの導入 技術支援部 辻 明典</p> <p>P② 徳島大学 i. school での学びと成長 —参加学生の視点より— 生物資源産業学部 生物生産システムコース 高田 太陽 他</p> <p>P③ 南海トラフ地震臨時情報が発表されたら徳島大学の教育は?! 環境防災研究センター 上月 康則 他</p> <p>P④ 地域おこし協力隊と協働した地域課題に挑む共創教育の実践 人と地域共創センター 川崎 修良 他</p> <p>P⑤ キャリア教育におけるキャリア形成意識の調査結果と考察 高等教育研究センター 畠 一樹 他</p> <p>P⑥ 学生プロジェクト活動におけるものづくりの課題 高等教育研究センター 森口 茉莉亜 他</p> <p>P⑦ 機器利用における講習の方法とその成果 高等教育研究センター 亀井 克一郎</p> <p>P⑧ 歯科衛生学教育におけるブレンド型授業の実践 高知学園短期大学 歯科衛生学科 和食 沙紀 他</p> <p>P⑨ プレ FD 段階におけるパターン・ランゲージの活用と知識生産 (1) ——Gibbons, M. のモード論を補助線として 社会構想大学院大学 実務教育研究科 伴野 崇生 他</p> <p>P⑩ プレ FD 段階におけるパターン・ランゲージの活用と知識生産 (2) ——私たちはパターン・ランゲージを媒介として何を考えたか 社会構想大学院大学 実務教育研究科 山口 圭治 他</p>
<p>14 : 00 ~ 14 : 15</p>	<p style="text-align: center;">休 憩</p>

<b>研究発表Ⅱ (口頭発表)</b>		
14 : 15 ~ 15 : 35	<b>口頭発表D</b> 座長：日野出 大輔 < 4-202 講義室 > D① 14 : 15 ~ 14 : 35 ■徳島大学入試結果 50 年を振り返る  高等教育研究センター 植野 美彦 他	<b>口頭発表E</b> 座長：赤川 貢 < 4-203 講義室 > E① 14 : 15 ~ 14 : 35 ■鳥人間プロジェクト活動報告 (2021-2023)  工学部理工学科 機械科学コース 横溝 建人
	D② 14 : 35 ~ 14 : 55 ■教養教育における ESD 講義の実施と意識変容の検証  大学院社会産業理工学研究部 豊田 哲也	E② 14 : 35 ~ 14 : 55 ■ゲーム制作から振り返る学生プロジェクトを成功に導く為に実践したこと  工学部理工学科 情報システムコース 岡本 航輝 他
	D③ 14 : 55 ~ 15 : 15 ■SDGs を主題にした講義「環境を考える」での学生実践の取り組み  環境防災研究センター 上月 康則 他	E③ 14 : 55 ~ 15 : 15 ■レイアウト伝達演習によるコミュニケーション能力向上の取り組み  徳島文理大学 香川薬学部 竹内 一
	D④ 15 : 15 ~ 15 : 35 ■オンライン授業の経験を活用した対面授業改善の取り組み  教養教育院 南川 慶二	E④ 15 : 15 ~ 15 : 35 ■学習者の能動性を活かした授業共創の試み  神山まるごと高等専門学校 デザイン・エンジニアリング学科 佐野 淳也
15 : 35 ~ 15 : 50	休 憩	
15 : 50 ~ 17 : 50	<b>特別講演 &lt; 4-202 講義室 &gt;</b> 演題：「新しい対面授業を考える」 講師：渡辺 雄貴 (東京理科大学 教育支援機構教職教育センター 教授)	
	<b>ディスカッション</b> テーマ：「講演に対する質問や日常の教育活動を進めるうえで困っていること」 コメンテーター： 渡辺 雄貴 (東京理科大学 教育支援機構教職教育センター 教授) 齊藤 隆仁 (徳島大学 FD 委員会委員長 教授) 吉永 哲哉 (徳島大学 医学部保健学科教務委員長 教授) ファシリテーター：吉田 博 (徳島大学 高等教育研究センター 准教授)	
18 : 20 ~	<b>情報交換会 &lt; 徳島大学 常三島キャンパス 生協食堂 Kirara &gt;</b>	

全員が、「そう思う」または「どちらかといえばそう思う」と回答しており、自由記述では「インストラクショナルデザインをどの様に活用するか、具体的に説明されており、分かりやすかった」、「学生にどのように伝えていくかを真剣に考えなければいけないと感じました」との意見があり、参加者の実践につながる情報提供がなされていたことが分かる。「f.カンファレンスは全体的に満足できるものだった」という設問でも 96% が肯定的な回答をしており、多くの参加者にとって満足できるカンファレンスであったものと推察できる。

一方で、課題としては、複数の参加者が指摘する点や大きなトラブルになった意見は挙げられていなかったが、「学内と学外の発表を同一のセッションに入れるようにしていただくと議論がより活発になると思います」との意見があり、今後は学内外の発表者については、発表時間や会場の配置にも配慮する必要があると感じた。また、いくつか特別講演のテーマ希望も挙げられており、次年度以降の企画において検討していきたい。

(吉田 博)

## 8. 大学院生のための社会で役立つ教育・指導スキル育成講座

### 8.1 目的・背景

大学院博士（後期）課程の学生は、修了後に大学教員となる場合や、大学教員とならない場合であっても、将来的に身につけた高度な専門知識や技術を他者へ教授する機会が生じる可能性が高い。また、大学院生としての日常においても、研究室で修士課程の学生や卒業研究生に対する指導的立場になることや、ティーチング・アシスタント（TA）やリサーチ・アシスタント（RA）として教員と共に後輩の学習指導に当たる機会もある。このような状況から、大学院設置基準が一部改正され、2019 年度より博士（後期）課程の学生に対するプレ FD の実施又は情報提供が努力義務とされた。

徳島大学全学 FD 推進プログラムでは、2020 年度より、大学で教育に携わる博士（後期）課程の大学院生を対象にプレ FD プログラムを実施して

いる。2023 年度は、ティーチング・ポートフォリオ・チャート（以下、TP チャート）を活用して教育活動を振り返る「日常の教育活動に関する振り返りと今後の目標設定」を実施した。

### 8.2 概要

#### ■開催日時

9 月 6 日（水）13:30-15:30

#### ■参加者数

1 名

#### ■内容

日常の教育活動を振り返り、具体的な取り組みから自身の教育に対する理念を明確にし、成果や課題、今後の目標を設定するための、TP チャートを作成する。TP チャートを作成することで、これまでの教育実践を整理することができ、これからの教育活動や将来に向けた具体的な方針や行動を明確にする。なお、同時刻に実施する、教員を対象とした TPWS と合同開催した。

### 8.3 成果と今後の課題

これまで徳島大学では、大学院生向けの FD プログラムとして、2018 年度に「TA を対象にした授業支援研修会」を実施し、2019 年度からは「すぐ使える 90 分セミナー」を大学院生を対象に加えて実施してきた。2020 年度からは、徳島大学全学 FD 推進プログラムにおいてプレ FD プログラムを実施し、2022 年度は実施 3 年目にあたる。

プレ FD プログラムの参加者数は、2020 年度は 6 名、2021 年度は 4 名、2022 年度は 0 名であり、2023 年度は 1 名であった。徳島大学では、博士後期課程の大学院生が修了後に大学等の高等教育機関で教員となるケースは少なく、プレ FD プログラムとしての大学院生のニーズを十分に把握できていない。現在、四国地区大学教職員能力開発ネットワークの FD 専門部会では、プレ FD プログラムの共同開発にむけた調査研究が行われている。四国地区のコア校（愛媛大学、香川大学、高知大学、徳島大学）においても、同じような状況であると考えられることから、これらの大学の担当者とは協働して、本学のプレ FD プログラム開発を行うことが重要である。

(吉田 博)



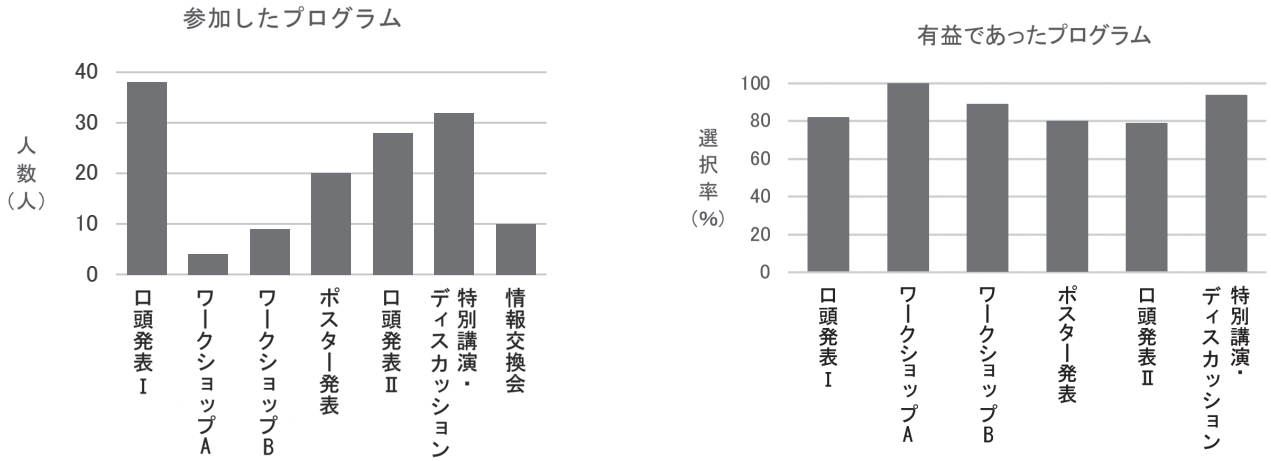


図 9 大学教育カンファレンスで参加したプログラムについて

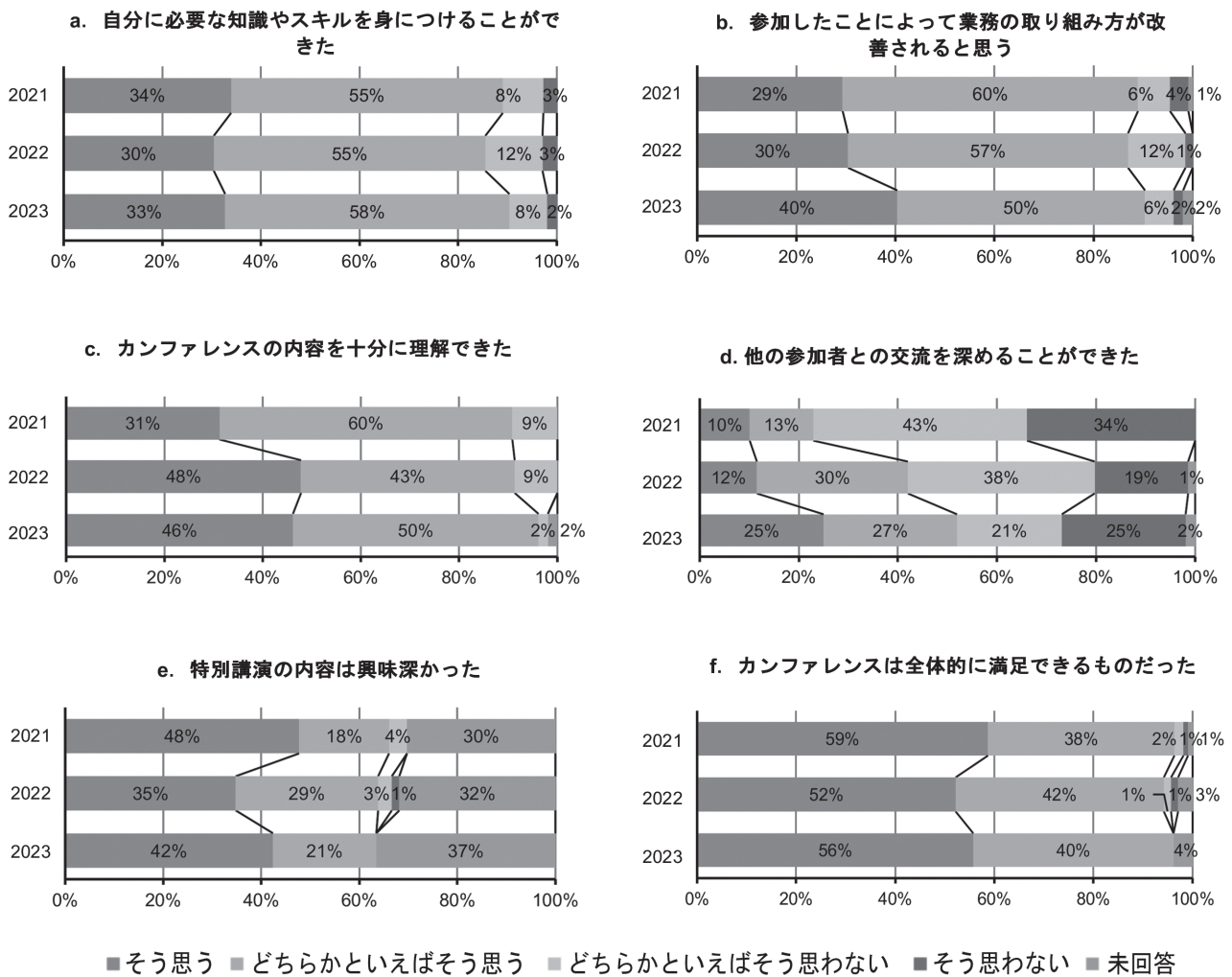


図 10 大学教育カンファレンスアンケート結果 (過去 3 か年分)

